



東日本大震災から学ぼう

— 根本的な心理現象を垣間見ることが出来る —

連休を利用しての列車の旅で手にした週刊誌の記事の、「がんばって」という「な！」が目にとまった。

「大震災から2カ月が過ぎようとしているが、『がんばろう！日本』『前を向こう』『二人じゃない』といった善意と応援のメッセージが繰り返し繰り返し毎日流されている。しかし、被災した人たちにとって、これらの言葉は本当に励ましになっているのだろうか。」という問題提起の内容であった。

被災者の声として、次のようなコメントを載せていた。「当初はとにかく家族や家をなくして茫然自失だったので、何か声をかけてもらえただけで嬉しかった。でも、長引く避難所生活の中で『がんばって』と言われるのも、どうがんばればいいのか。他人事だからこそ、そんな風に見えるんだって、正直ムカついてくる」(30代男性)

「福島の人には、放射能のことで差別を受けるという話も聞きますし、もしかして私の仕事が全然決まらないのもそのせいなんじゃないかって疑心暗鬼になります。



▲被災地に送られた寄せ書き

期待をもたせるような言葉はもういりません。「二人じゃない」なんて甘いことよりむしろもう『ダメならダメ』とはつきり言うてほしい(山形に避難して毎日ハローワークに通っている福島の50代女性)

全国的にお母さん層を中心に好評であると言われる「あいさつの魔法」のCMについても、避難所生活を送る人には辛い歌だという。「テレビであの歌が流れたらすぐ消す。あのCMを見るとオレの目の前で津波に巻き込まれて行った家族の姿がよみがえるんだ。(楽しい仲間が増えていくCMだが) こっちは周りの人間がどんどんいなくなっただから」(40代男性)

日本人一人ひとりがこの未曾有の危機を我が事として捉え、「がんばろう日本」と口にすることは大切だ。しかし、「非被災者」が「被災者」に同じ言葉を語りかけた瞬間、意味合いの違ったものになってくる。家族や家を失った「被災者」と地震や原発の恐怖に怯えながらもこれまでとほぼ同じ暮らしをしている私たち「非被災者」との間にはどうしようもなく埋まらない溝(体験した者にしかわからないことがら)があり、一片の悪意がなくとも、どうしても「上から目線」を帯びてしまう。それを複雑な思いで受け止める被災者もいることに、私たちは鈍感であってはならない。マイノリティーであることを売りにして大統領になったオバマさんも、ウサマ・ビン・ラーディン掃討作戦にアパッチ族リーダーだった「ジェ

ロ二モ」の名を使い、利益優先で衛生管理を無視しユツケ事件を起こした焼肉店、安全神話を掲げ原子力政策を推進した多くの関係者等々いかに鈍感なことか。

しかし、きつい・つらい思いを共有しようとして現地に入り懸命に努力している「非被災者」(一般ボランティア、芸能界、スポーツ界、天皇家等々)もたくさんいるし、それに力づけられ復活へのエネルギーを沸かせている「被災者」も大勢いることが心強い。人間一人ひとりに「深い想像力」と「厚い思いやりの心」が今こそ問われている。「非被災者」と「被災者」を「差別する人」と「差別される人」に置き換えると、まさに「人権」を考える根本的な心理現象を垣間見ることが出来る。

文責 生涯学習課 長木

第4回国東市隣保館まつり

「JUNJUNの川柳」応募作品

二人してこころ通わす夕げどき

国東町 清原 崇敏

声かけは

あなたのそばにいるあかし

武蔵町 齋藤 颯

お知らせ

☆同和問題学習会 (隣保館)

5月27日(金) 午後2時~4時

問い合わせ 国東市隣保館

☎0978-68-1722